
首に乗るミケ猫

猫舌ソーセージ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

首に乗るミケ猫

【Nコード】

N1574C

【作者名】

猫舌ソーセージ

【あらすじ】

部屋に一人でいる女子高生。女子高生は退屈になりテレビゲームを始めようとするのだが……。

八月十日 午後八時三十三分 練馬区

鬱蒼とした森の木々のように十四階建てのマンションが数棟立ち並んでいる。その内の一棟の新築のマンションは、北西に走る一方通行の道に接してオートロックの玄関があり、常に監視カメラが作動している。そのマンションの五階、501号室のリビングでは大人が五人は座れるであろう大きな黒い牛皮のソファーに腰を掛けて、42V型ハイビジョンプラズマテレビを見ている葵の姿があった。

私立女子高校三年の北島 葵は、白いTシャツにジャージパンツというラフな格好でポテトチップスを口に運んでいく。床に置かれた扇風機の風が葵の長く艶やかな髪を靡かせる。テレビの大きな液晶に映るは、若手のお笑い芸人。葵の好きな芸人であった。家の中には、葵以外にもペットのミケ猫がいるだけで人間はいない。葵には両親がいたが田舎に住む父の母、つまり葵にとっての祖母が倒れたという一報を受け、帰省していた。両親は葵も連れて行くことしたが、葵自身が「一人でも大丈夫だから。それにこれでも受験生だし、勉強しなきゃ」と言うので、心配ではあったがいくらかのお金を置いていき葵に留守番を頼んだのだった。

「あははは！ 超ウケるんですけどー！」

しかし、葵は勉強などせずにも今もこうしてお笑い番組を見ながら大笑いしていた。つまるところ葵が残ったのは、一人暮らし気分を味わいたかっただけなのだ。

番組が終わると葵は特にやりたい事もなく退屈な時間を持て余していた。両親が田舎に帰省すると決まった時、葵は片っ端から友達に家に泊まりで遊びに来ないかと誘ったが、皆受験勉強で忙しいと断られたのだ。

……友達より勉強を取るなんて酷い奴らよね

と葵は勝って極まりない言葉を心の中で吐き捨てた。退屈な葵は4LDKの一人では広すぎる部屋を見回す。すると一つのモノに目が留まる。それは父が趣味でやっている古いゲーム機だった。今はDVDでゲームをする時代だが、父はカセット式の古いゲーム機を好んで使っていた。普段はゲームなど全くしない葵だったが暇潰しには良いかとゲーム機を起動させる。コントローラーを手に取りテレビ画面を見る。

ゲームソフトが入っていません。ソフトを入れてください。

テレビ画面に表示された文字。それを見て初めて葵はゲーム機だけではゲームが出来ないことを知った。葵はゲーム機の近くにソフトがずらーっと並べられているラックを発見する。葵の父は几帳面で購入日が記されたシールがソフトに貼られており、きちんと購入日ごとにソフトが並べられている。葵はその中で今日の日付けが貼られていたソフトを取り出す。どうせやるなら一番新しいソフトを、という単純な考えで葵はそのソフトを選んだのだった。そのソフトのパッケージには「首斬りさん」と赤い文字で書かれている。そのソフトをゲーム機本体に差込み電源を入れると、テレビ画面にパッケージと同じタイトルが表示された。タイトルの下には、ドット絵キャラの女の子が右から左へと歩いてくる。タイトルは気持ち悪いけどキャラクターは可愛いなと葵は思った。が。

ぼとり。と女の子の首から上が落ち、低く籠もった笑い声が。「え?」

葵は背後を振り返る。だが、別段何もない。

「気のせいよね……」

葵は背後から笑い声が聞えたような気がしていた。

……それにしても気持ち悪いゲームね。やめようかな……。

テレビ画面にはタイトルと首を失った女の子。そしてスタートの文字が記されてあった。葵の親指がスタートボタンにかかる。それ

は怖いものみたさから来る衝動だったのか、気持ち悪いと思いが
らも葵はスタートボタンを　　押した。

「痛っ!!!」

スタートボタンを押したその刹那、コントロールを持つ指先に静
電気に似た痛みが走った。

……何？

コントロールを持つ指先に目をやるがケガなどは一切ない。葵の
戸惑いを無視してゲームはすでに始まっていた。おどろおどろしい
BGMが流れ、一人の女の子キャラクターがぽつんと立っている。
それはタイトル画面に出てきた女の子だった。葵は自分の手ばかり
を気にしている為、操作されずにプレイヤーキャラとなる女の子は
立ち止まったままだ。すると右画面から敵キャラクターらしきお化
けのような白いフワフワとしたドット絵キャラクターが左画面の隅
っこで佇んでいるプレイヤーキャラに迫る。葵はやつと視線をテレ
ビ画面に向けたが、時すでに遅し。プレイヤーキャラは敵キャラに
接触し点滅して消えた。

「あああっ!!!」

突然葵は悲鳴を上げコントローラーを投げ捨て右手の甲を左手で
押さえる。

「ううっ!!!」

そこからは、紅い鮮血が流れていた。

……痛いっ痛いっ！　　なんなの！　　なんなの!？

葵は自分に起こった出来事が理解出来ずに、恐怖よりも怒りが込
み上げてきた。だが、そんな怒りもすぐに引っ込む事になる。画面
を見るとプレイキャラは復活しており、再び敵キャラが迫っていた
のだ。咄嗟に葵は投げ捨てたコントローラーを手に取り敵キャラか
ら逃げようとした。だが　　。

「どうやって操作したらいいのよ!!!」

ゲームをした事もなくソフトの説明書すら読んでいない葵は、ど
う操作すれば良いのかわかっていなかった。適当にガチャガチャと

動かすがプレイヤーキャラは逃げるどころか逆に敵に近づいて行く。そして再び敵キャラに接触してしまった。

「ぐっああおっ!!」

先程よりも一段と大きい声で葵は叫んだ。その声はあまりにも低く、男の声と間違う程のモノだった。

「いやだ……いやだあ……」

葵はソレを見て恐怖と激痛によりソファアを濡らした。ソファアがびしょびしょになる程の失禁。葵の目線の先、そこには有り得ない方向に曲がっている右足の姿があった。

「やだやだやだやだやだっ!」

葵は激痛を堪えてコントローラーを握り直す。敵が再び迫っていたのだ。

……逃げなきゃ、逃げなきゃ! 死んじゃう! 殺される! 嫌だっ!!

このままでは死ぬ。葵はそう直感していた。だが、焦りと恐怖と激痛により冷静な操作など出来る訳もなく敵キャラから逃げることは出来そうもなかった。

「いやあーっ!!」

葵は恐怖を抑えられなくなり、コントローラーを投げ捨て頭を抱えて強く目を瞑った。

……あれ?

どれくらいそうしていただろうか。葵の体に再び新しい激痛が走ることはなかった。葵はおそろおそろ目を開ける。すると

「にゃーっ」

ミケ猫がゲーム機のリセットボタンを踏みながら、葵を見て鳴いていた。画面には何も映し出されてはおらず真っ暗になっている。

……助かった……の?

葵は一気に体から力が抜け落ちた。ソファアに深く腰を沈めて泣

き出す。それは激痛による涙か安堵による涙か。

「ミケえ、ありがとうありがとう。あんたは私の命の恩人よおー」

ミケ猫を抱えて葵はミケにほお擦りをしようとした。が、頬がミケ猫からどンドン遠ざかり 床へと落ちた。

にゃーにゃーっ！

ミケ猫が鳴く。首から上を失くした主人の首に乗りながら 。

扇風機の風が床に置かれていた説明書のページをパラパラと捲る。

決してプレイ中にリセットしないで下さい。

(後書き)

感想やアドバイスを貰えたらすごく嬉しいです。
次回作の礎とさせていただきます。

首に乗るミケ猫

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1574c/>

首に乗るミケ猫

2009年3月24日09時22分発行